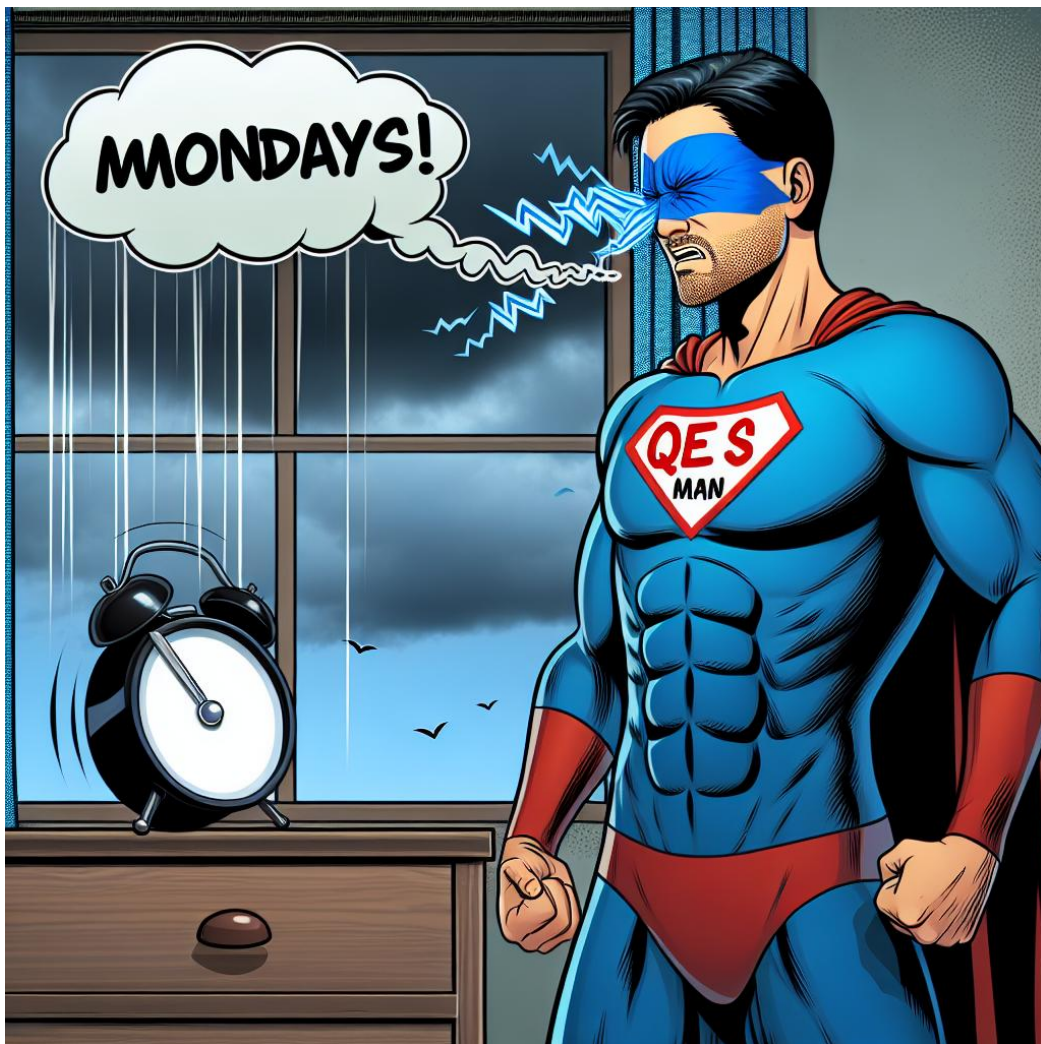


スーパーヒーロー

QES マンの月曜日の憂鬱

平凡なヒーローの非凡な一日

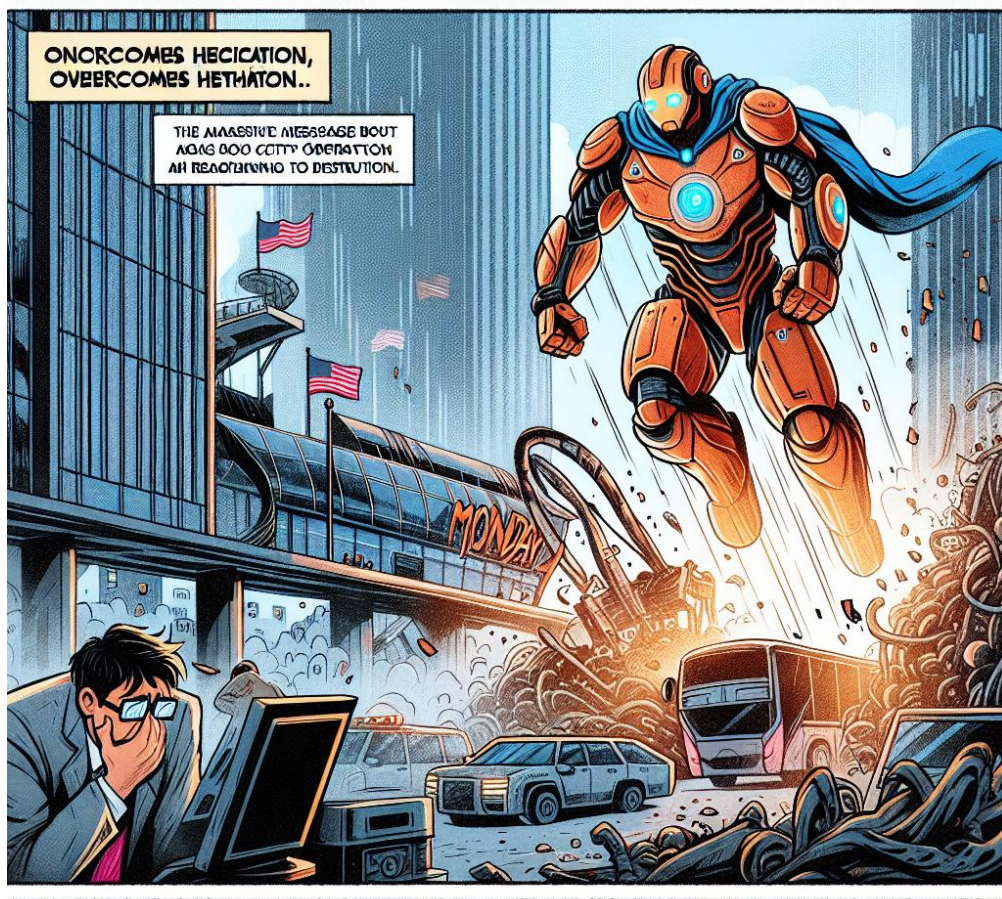
月曜日の朝、QES マンは目覚まし時計のけたたましい音で目を覚ました。その音が彼の超人的な聴覚に刺さるようだった。彼はスーパーヒーローでありながら、どうにもこの月曜日という日に苦手意識を持っていた。世界を救う力はあるっても、月曜日を快適にする力はまだ発明されていない。窓を開けると、どんよりとした曇り空が広がり、さらに彼の気分を沈ませた。



「今日も始まったな…」彼は深いため息をつきながら、スーツを手を取った。そのスーツは彼のヒーロー活動を象徴するものであり、街の人々からは絶対的な信頼を寄せられていた。しかしそのスーツを着る度に、責任の重さが肩にのしかかるような気がしてならなかった。QES マンの朝のルーティンはいたって普通だった。朝食はいつものシリアルとコーヒー。スーパーヒーローもエネルギー源が必要である。しかし、何かが違った。彼はスプーンでシリアルを食べながらも、その心はどことなく落ち着かない。「何か大きな問題が起きる気がする…」彼は予感を拭い去ることができなかった。



ミッションの開始



午前 10 時、QES マンの通信デバイスが鳴り響いた。「市内中心部で大規模な混乱が発生しています。急行してください！」と緊急メッセージが届く。彼は一瞬ためらったものの、すぐにスーツを身にまとい、空へと飛び立った。月曜日の憂鬱を吹き飛ばすように、彼はその場へ向かう。

中心部に到着すると、巨大なロボットが暴れ回っていた。そのロボットは何者かによって遠隔操作されているようで、「破壊」のみを目的としているようだった。QES マンはその場を見渡しながら、どのように対処すれば効率的かを瞬時に計算した。「このロボットの制御装置を見つけなければ！」彼は自分の能力を駆使して、ロボットの弱点を探した。

困難な選択

戦いの最中、QES マンはロボットの制御装置を発見した。しかしそれを破壊するには、近くにいる市民を一時的に危険にさらさなければならない。彼は葛藤した。安全を優先するべきか、それとも迅速に問題を解決するべきか。ヒーローとしての使命は彼を追い詰めた。



「決断するしかない！」彼は周囲の市民に避難を指示し、制御装置を狙った。数秒後、装置は砕け散り、ロボットは動きを停止した。街は静寂を取り戻し、市民たちは安心した様子で彼を称賛した。しかし、QES マンの心にはまだ何かが残っていた。

月曜日の終わり

その日の終わり、QES マンは自宅でコーヒーを飲みながら振り返っていた。「自分は本当に正しい選択をしたのだろうか？」彼は自問自答を繰り返した。スーパーヒーローであることは、時に孤独で、時に心の重荷を伴うものだ。それでも、人々の笑顔を見ると、彼は少し救われた気持ちになった。

「まあ、これが月曜日ってものさ。」彼は苦笑しながらカップを置き、ソファに身を沈めた。次の月曜日がどうなるかは分からないが、今日の彼は確かに誰かの希望だった。

